

文集「三多摩演劇をみる会と私」

私たちはコロナに負けません。
みんなのちからでみる会の危機を乗り越えましょう。

三多摩演劇をみる会に誘われて
たあちゃん(タンゴ)

初めに「三多摩演劇をみる会」に誘われた時は夜の部だけでした。「夜は弱くて、すぐ寝てしまうので」とお断りしていました。その後「昼・夜の二回公演になったのでどうか」とお誘いを受けました。

「昼の部」があるなら、ということが入会したのが2007年9月の『令嬢ジュリー』のときでした。

私は演劇を観るという事にはあまり縁がありませんでしたが、早いもので今年で14年になりますから、ずい分多くの演劇を観たことになりました。

はじめのころは例会を観るだけでしたが、何年かして運営サークル会議にも少しずつ参加するようになり、

「演劇をみる会」のことや、例会の作品について少しずつ勉強して予備知識を持って当日を迎える事ができ、より楽しめるようになりました。

またゲネプロが観られたり(いつもあるとはかぎりませんが)、舞台の準備や後片付けのお手伝いができるのも運営サークルの楽しみの一つになりました。

そのためか運営サークルになったときの作品はより強く心に残っています。

このころは台本を借りて読んだり、原作があればそれを読んだりするようにもなりました。

「演劇をみる会」に誘ってくださったTさんのおかげで、世界がちよっと広がったような気がしています。誘っていただいて感謝しています。

残念なことは途中で昼公演がなくなってしまうことです。でも、他団体で観させてもらえるので助かっています。

「三多摩演劇をみる会」も会員が増えて昼・夜の二公演になるといふなあと、思っていて、いろいろな人に声をかけているのですが、「コロナのせいもあって、なかなかむずかしいです。はやくコロナが収束して欲しいです。」

「三多摩演劇をみる会」がいつまでも続くことを願っています。



三多摩演劇をみる会と私
木城 三平(すずらん)

三多摩演劇をみる会に入会して何年になるだろうか。「三多摩演劇をみる会 40年の歩み」にある年表と、私の記憶にあるみる会の入会を誘われた時の情景を結びつけて見ると、1979年頃と推定できる。

当時、青梅にあった私の職場に、初代事務局長の阿部仁さんが訪ねて来られ、みる会の事を熱心に話して行かれた。

年に何回か「都民劇場」で観劇していた私は、「近くで、安く、良い演劇を！」という、その頃謳われていたみる会のキャッチフレーズが気に入って、日ならずして立川南口にあったみる会事務所に入会手続きをしに行った。

年表によれば第27回例会、劇団民芸の「小さな広場」からだ。42年前の話である。

以来、時には声を掛けられて役員になったことや、全国規模の演劇鑑賞団体の交流集會に泊りがけで参加したり、例會事前学習のための中国ツアーに参加したり、二度の經理不明朗事件でもみくちやになつたりいろんな出来事を経験してきた。

楽しかった時は勿論大いに入れ込んだが、嫌なことがあつた時代も、「芝居を見続ける事が出来る」というこの一点を頼りにみる会を応援してきた。

舞台の中で繰り広げられるドラマは、私が実生活では絶対に体験できない出来事を、生身の役者が体験して見せてくれる。生身であるだけに真実味があり、その後のストーリー展開に興味が湧いてくる。

ストーリー展開に同感であれ、否定的であれ観客の生身が反応する。

反応した空気を役者たちが生身で感じ取り、生身で打ち返してくる。この反応の繰り返しが観劇の醍醐味である。楽しみである。

たまには乗れないものもある。好きでないジャンルもある。けれどその中にも見終わって、意外や記憶に残つた登場人物の生きざまとか、刺激を受けたセリフとか、会費相当分のお返しがあるものである。

その感激を自分だけの満足にしないで、観劇未経験者にも語つて行って入会を勧める。会員を増やすために誘うのでなく、「あなたの人生を豊かにするために観劇をお勧めする」という立場を今後も続けて行きたい。みる会を存続させることを願つている一人である。



芝居を楽しみ、人と人との繋がりを大切に

宮崎 秀男(つけまつげ)

演劇との出会いは、職場の友人に誘われて、劇団「おけらぎ」に顔を出したことです。友人の、女性が多いという魅力ある言葉です。いつの間にか舞台に立つようになりました。

劇団では白鳥事件を題材にした「南下する日のために」などで政治に目覚めていき、やがて活動の中心を職場に移し、組合活動に専念しました。

そんなある日、阿部仁さん(三多摩演劇をみる会の創設者)が訪ねてきて、近くで生の演劇を見られる演劇鑑賞会を作りたい、と熱心に語られました。

私は福生市から西側を担当し、

みる会勧誘のチラシとチケットを配布しました。三交代勤務で出勤時間の前後に、役所・学校・工場を訪ねました。私は車の免許を持たずに尋ね歩くので、どこでも歓待してくれました。

最初の例会・劇団東演の「どん底」(1974年11月)では、京王線明大前の稽古場に稽古を見に行き、演出家の八田元夫さんに会うことができました。八田先生は、時間が許せばデモにも必ず参加すると言っていたことも思い出します。

みる会では多くの個性や特技のある人と出会いました。浅間山の朝焼けとダイヤモンド富士の撮影会に誘われたり、昭島市民文化祭にみる会のサークル(ライラック)が参加し、文化祭の実行委員なども引き受けました。みる会で得たものは多数あり、その後の活動に役立っています。

演劇は、人生や色々な出来事を可視化すること。想像力や感性を

豊かにするのも演劇だと思っています。日本政府は文化予算をもっと増やしてください。

演劇鑑賞会は、芝居を見て楽しむとともに、人と人との繋がりを大切にすること、元気を分かち合うこと、見る会の存在を誇りに思える…スタイルを編み出して欲しいと思います。そうすれば、自然に会員が増えてゆくと思います。



芝居を観るのは楽しい！

Fサークル

舞台の上で繰り広げられる世界は、多くは自分の人生で大抵経験したことのない出来事であって、この先もないと思われれることのほうが多そうである。

しかし、そこで演じられる役者のセリフや演技から、自分にも共感できる思いを感じ取れるとき、自分もそんな人生を生きたような気持ちになってくるのが楽しいのだと思う。そんな想いで会員になって20年以上が経った。そして今、純粋に芝居を楽しめているだろうか、と思うことがある。

この会が営利を目的としない自主運営であること、運動体としての演劇文化発展のため多くの劇団を支

えていくこと、そのために常に会員を増やしていくことの理念に限界を感じている自分がいるのである。

年齢を重ねて友人関係も狭くなり、加えてコロナ禍が入会を渋らせてもいる現実がある。家族に病気のひとがいる、医療、介護職の人がいる、公共の交通機関を使うのは避けたい：など、敬遠される理由はたくさんあります。

そういう不安を持つ気持ちをはねのけて入会を勧める勇気が持てないのです。今、会員の減少による会の存続の危機といわれますが、ゆったりと演劇を楽しんでいた以前の自分が懐かしいです。

自分勝手と思われるかもしれませんが、正直な気持ちです。



三多摩演劇をみる会のみなさんへ
浦上 雄次(かげろう2)

「七転び八起き」と言う言葉があります。この意味は、何度失敗してもあきらめず、そのたびに勇気を出して立ち上がると言うことです。

人生同様、会社でも組織でも、はたまた団体でも苦境に陥ってどん底まで転落することがあります。

しかし、その都度困難に負けずに関係者がみんな努力すれば、危機を突破して立ち直る事が出来ます。

事実、三多摩演劇をみる会は、今までに2回も財政問題が原因のため存続の危機を経験したことがあります。

しかし、その度に「ことに会員が「演劇の灯を消してはならぬ」との熱い意志と堅い決意を結集して見事立

ち直らせました。

今回、会員の高齢化による会員数の減少傾向が進む中、思いもかけない新型コロナウイルス感染が2年有余も続き、その終息の見通しが見当たらないこともあり危機を一層深刻にさせています。

でも、全会員が連帯して、「演劇の灯を消してはならぬ。みんなで我が三多摩演劇をみる会を守り抜くぞ！」と心を新たににして、衆議一決、堅い決意で立ち上がるならばそれは可能です。

何故ならば、私はキリスト者ではないけれど聖書の一節に「艱難は忍耐を生み出し、忍耐は練達を生み出し、練達は希望を生み出すことを知っている。…。そして、希望は失望に終わることはない」と書いてあるからです。

会員みなさん、希望を持って前に進み、降りかかったこの難事業にみんなで一緒に挑戦しようではありませんか。

せんか。



お芝居は見なくても生きられるけれど

松本 貞夫(わな)

高校生の頃、高崎で「夜明け前」を見たのが演劇との出会いだったように覚えています。重厚な舞台装置に圧倒され、映画とは違うと感じました。

その後、就職先が三鷹だったので東京労演から三多摩演劇をみる会

へと移りお芝居を見てきました。

みる会でも「夜明け前」は例会になりましたし、その他にもいくつも感動深い舞台に出会いました。そういう時は合評会やサークルの人の話が楽しかったです。

お芝居は見なくても生きるのに支障はないのですが、見ればいろいろな人生を感じることもできるし、自分が主人公だったらと空想する事もできます。

役者さんがその舞台でその時を演じるのはとても素晴らしいことだと思えます。

そんなお芝居を近くで見られる三多摩演劇をみる会が長く続いて欲しいです。



民藝の「泰山木の木の下で」に圧倒されて演劇が闘うエネルギーを与えてくれた

岩田 克彦(かげろう)

私は、1958年に高校を卒業して東芝に入社しました。そして1960年に東京都立大Ⅱ部に入學しました。初めてデモに行ったのが、樺美智子さんが亡くなった日でした。学校には行きましたが、教室には出ない事が多い日々でした。

1962年に東芝を退社して時間が出来ました。演劇を一度見てみようとして初めて見たのが、民芸の「泰山木の木の下で」でした。

演劇の強力な迫力に圧倒され、それから演劇の虜になりました。東京労演に入り、毎月芝居を見る生活となりました。

その後は田無市の研究所に7年勤め、労働組合の書記長も経験しました。退職して仁保事件の事務局となり広島市に移りました。給与は公務員の半分になり、しかもキチンと支払われないことがしばしばでした。

それから大須事件・国民救援会・演劇をみる会と通算27年間続けることになりました。

今、思い出すのは、「どん底」「冬の旅」「かさぶた式部考」…などです。

演劇は私の考え方に大きな影響を与えました。生活や運動に行き詰まった時は、演劇を見て奮い立ったものです。演劇が闘うエネルギーを与えてくれたと言えます。

私がみる会の事務局員になったのは、1982年6月(第42回例会)からです。

当時は「会員制度を確立し、例会運営にサークルが総参加すれば会員が増える」と言われている時期で

した。結果的にその通りでした。

その後、日本経済の発展と共に会員が増えましたが、この間、取り組んだことは、殆ど先進的な組織の経験を取り入れることでした。

次に「ヨコ型の組織・ヨコ型の指導」を取り入れようと努力しましたが、実現できませんでした。

役員会と事務局が主導してお手伝いの「当番サークル」が下請けするという上意下達の「タテ型」から、初めから終わりまでを「運営サークル」で行うという民主的で平等な「ヨコ型」への転換です。

その後、財政運営をきちんとなかったために、大きな混乱をもたらした、会員が大きく減少する事態を招き、大変申し訳なく思っています。

いまみる会の危機を迎えて、会員増に成功している組織の取り組みから学ぶことも有益だと思えます。

私と演劇と鑑賞運動

杉 陽子(炎サークル)

演劇との出会いは、高校の演劇部で「深いキズ」という作品で主役のヌヤという役をやった時です。その時の観客が涙してくれれたことが強い印象として残っています。

1970年に広島労演のポスターをみて、事務所を訪ね入会しました。階段をのぼってドアを開け受付の椅子に座った時の情景は今も忘れられません。

その年に役員になり、1979年の初めまでやっています。全国総会に出席するために東京にも何度か来たりもしました。

当時4,000名の会員がいた時代なので、役員も100人余りいて、ほとんどが20代という時代でした。

当時も、観る前に学習し、観た後に語りあい、感想文を書き、サークル誌(でこぼこサークル)をつくっていました。芝居から受けた影響はとて大きかったです。

入会当時みた作品で水俣病を描いた『告発』、教科書問題を描いた『若い座標』などを通して社会の問題がはつきりと見え、芝居を通して自分の生き方が決まった時期です。

それは私だけではなく当時の若者たちが芝居を通して、活動を通して、目に見えて、どんどん変わっていききました。芝居のもつ力を今も強く感じています。

今の若者も悩んでいるのは変わらないのだから、みる会に入って芝居を観て語り合い、今の社会と一緒に考えあいたいと強く、強く思います。

若者がこの事務所を使って、飲みながら今の社会について語り合ってほしい…。

そういう場がいっぱいできると、世

の中が変わる大きな力になると思うのです。

課題は若者の会員が少ないことです。職場サークルがたくさんあった時代の会員がずっと観続けこの会を支えています。しかし、高齢化により、夜出にくくなりつつあります。

今やらなければならぬことは、若者の会員を迎え彼らに引き継いでいくことと、夜・昼の2ステージにすることです。

今がやる時だと思えます。これは、この会で芝居を楽しんできた私たちがすることだと思えます。

新劇運動は、戦争に反対し、平和を願い、社会に不公平を訴え、人間の尊厳を守る運動です。その新劇運動に波長を合わせて活動しているのが私たちの鑑賞運動です。素晴らしい運動だと思えます。

会員に誘うと、好きな演劇を都内に観に行くから「みる会」には入らないという人がいますが、それは個

人の趣味です。それとは違い私達のこの会は、劇団と共に創る演劇鑑賞運動であることを伝えていきたいと思えます。

この地にこの鑑賞会があることはとても大事な運動です。厳しい状況ではありますが、この地から演劇文化の灯を絶対に消すわけにいきません。

この会は一人ひとりの会員がつくっている会です。とても素晴らしいことだと思えます。一人ひとりの会員が力を出し合うことで、この会を大きくすることができるのです。

みんなで頑張っていきたい！と心から思う日々です。



三多摩演劇をみる会とわたし
北 南子(茜雲)

私は演劇が好きで、砂防ホール・俳優座劇場・三越劇場・歌舞伎座・芸術劇場・日生劇場など都内のあちこちの劇場でいろんなジャンルの劇を見て楽しんでいました。

歌舞伎座や日生劇場はチケット代が高くて、安い席だと二階の後ろの壁際だったりしましたが、それでも劇が見られることで満足していました。

そんなことをしている時「近くで演劇が見られるよ」と教えてくれた人がいてこの会を知り、すぐ入会しました。

近くの会場で大きな劇場でやるのと同じ劇が楽しめて、豊かな気分になりました。

入会した年は忘れませんでした。それからずっと「三多摩演劇をみる会」で劇を楽しんでいます。「三多摩演劇をみる会」はいろいろなジャンルの作品を提供してくれるので、思わぬ素晴らしい作品に出会えます。

様々な考え方や人生を舞台で教えてくれます。時には、自分の好みに合わない作品もありますが、自分では希望しないだろう作品も受け止め方、考え方で新劇の面白さだと思います。

また、例会の前に作品を深める学習会があるのも勉強になります。

いま、「三多摩演劇をみる会」の会員数が減少していることはとても心配です。

近くで演劇を楽しめる機会がなくならないように、会員を増やしてこの会が存続できることを願っています。

三多摩の文化の灯は消してはならない

石沢 義輝(峰)

私は1942年4月に神奈川県川崎市で生まれましたが、戦争が激しくなると家族は両親の故郷の山形に転居し、そこで育ちました。小中高と12年間病気以外で休んだことはなく、皆出席で学校に通いました。スポーツは中学から卓球に楽しみ、家が貧しかったため直ぐ就職できる商業高校に進学しました。山形県の卓球インターハイでベスト4位になり、東北大会に出場したことが私の誇りになっています。

武蔵野市の横河電機に就職し、組合の青年婦人部で活動しているなかで東京労演に入りました。

東京労演に入り例会会前の学習会、

例会後の合評会、レクリエーション交流会に参加しているうちに、職場のある西部地域役員、機関紙班員になり、地域活動にも参加するようになりました。

1969年に27歳で八王子に家建て武蔵野市の職場に通い、都心の労演会議に参加と忙しい独身時代を過ごしました。

1974年の三多摩演劇をみる会創立には、東京労演で活動し八王子に住んでいるということで、名ばかりの委員長になりました。活動は事務局長の阿部さんにお任せでした。3年ほどでつまらないことで意見が合わず突然委員長を辞めてしまい、多くの人に迷惑をおかけしました。

東京労演の会員は続けていきましたが、2000年頃にみる会に再入会しました。2007年には運営委員にもなりました。2011年に前立腺がんが見つかり委員を辞して、い

まは例会を楽しませてもらっています。

また2015年にはみる会40周年記念誌づくりにも参加しました。

コロナ感染で苦しんでいるなか、三多摩演劇をみる会は、会員の頑張り劇団と一緒に夢のある芝居を作ってきました。

三多摩に文化の灯を広めていきなさい、三多摩の文化の灯は消してはなりません。



みる会と私

カモミール(しもばしら)

入会したのは40年以上前です。長いおつき合いになります。印象に残った作品は、と過去の例会作品をみますと、まったく覚えていないのがたくさんありました。さて作品のせいか、私のせいか…。多分後者でしょう。

仕事を終えてあたふたと会場にかけつけ、暗い場内に忍びこむ、そしていつのまにかぐつすと…。大きな拍手で目が覚める。エーツ今日の芝居どうだったの？なんてことがありました。覚えていないのは、そのせいだったのでしょうか。

定年を迎えて、じつくり鑑賞できると思ったのですが、最近どうも耳が遠くなったようです。芝居用に補

聴器を購入した昨今です。それにしても補聴器って高いですね。

しみじみと心打たれた作品は、前進座「さぶ」「五重塔」、青年劇場「翼をください」、文化座「遠い花」、こまつ座「兄おとうと」、東演の朗読劇「月光の夏」などなど。余韻にひたりながら、帰ってきました。もう一度観たいです。

先日、こまつ座の「化粧二題」を観て来ました。内野聖陽さんの一人芝居、すばらしかったです。

化粧しながら喋る、楽しみながら演ずるなんてすごいと思いました。いつか、叶うことができるなら、三多摩で観たい！

そうそう、だいじなことを書き忘れました。すてきなお芝居を三多摩の仲間といっしょに観たいのです。

コロナ禍の中でたくさんの方のなつかしい会員が退会しました。でも500人以上の芝居好きが踏み止まってくれました。

ただ観るだけでなく、いろいろ注目の多い会ですが、この会のよさが分かっている方々が残っています。とても心強く思いました。

コロナに打ち勝って、また、以前のように楽しく観られる日が必ず来ます。会員の皆さん、がんばりましょう。



特効薬はないけれど

内田 雄二(小金井)

私はいわゆる団塊の世代で、みる会に入会したのは職場の上司に誘われて30歳の頃でした。みる会ができてまだ5年めでした。

当時のみる会の事務所には、「近くで、安く、よい演劇を」という貼り紙がありました。私は演劇鑑賞の「趣味の会」だと思っていましたので、職場の仲間を誘うときも、その貼り紙のとおりに説明しました。

演劇鑑賞会が全国にあることも知らず、新劇運動の平和と反戦の歴史や鑑賞運動の意義なども、ずいぶん後になってから学習したように思います。

それでも当時はサークルの仲間を増やすことにあまり苦労せず、みる

会も順調に会員が増えました。ずいぶんいい時代だったなと思います。

ところがバブルがはじけて情勢が一変しました。

みる会「40年の歩み」を見ると、1991年のバブル絶頂期(最大会員数3,450名で4ステージ)を境に、バブル崩壊後は30年間ずっと会員減の後退が続いています。

当時、みる会の会員は共働き、子育て中の女性会員が多かったのですが、バブルがはじけて、不況の長期化と労働運動の退潮のなかで労働環境も悪化し、働きながら演劇を楽しむという心の余裕も時間も奪われていきました。

そして近年は社会の高齢化が進み、「両親の介護問題やご自身の高齢化に伴う体調不安などにより、止むを得ない退会が増えています。

長年の会員減少が、自己都合よりも背景にあるこうした社会情勢の変化に起因していると考えれば、な

かなか鑑賞運動論だけでは会員を増やすことができません。悩ましいところです。

すると運動論に接ぎ木して、往々にして「本気になれ」という精神論が出てきます。しかし竹やりでB29は撃ち落とせないのです。

では希望はないのでしょうか。ありません。

全国に目を転じると、学ぶべき事例、交流したい団体があります。

4月のみる会総会で紹介された富山県の「となみ演劇鑑賞会」は、1996年の発足以来連続して、いまでも会員数を増やし続けているそうです。

奇跡です、希望はあるのです。なぜ会員を増やし続けられるのか、絶えず会員を増やす努力を続けるエネルギーの源・秘訣を学びたいと思います。

解決の特効薬はありませんが、困難な時こそ情報を公開して共有す

ることが大事です。

思考停止は老化現象です。今は柔軟な発想で知恵を集めてみんなの問題を解決する、という姿勢が求められています。

演劇文化は決して「不要不急」なものではありません。劇団・演劇人も必死です。コロナに負けたくはありません。

役員とサークル代表者まかせにせず、みんなのちからでみる会を支え危機を乗り越えましょう。



俳優からのメッセージ

演劇鑑賞運動は、世界に類のない日本独自の文化運動で、鑑賞会と劇団がともに手を携えて発展させてきました。

俳優は「鑑賞会のみなさんの演劇を迎える喜びに支えられている」と語ります。佐々木愛さん、加藤剛さんからのメッセージを紹介します。

なお佐々木愛さんは2011年～2013年のみる会会員手帳に、加藤剛さんは2001年～2010年の会員手帳に所収の言葉です。

佐々木 愛（劇団文化座）

私が初めて鑑賞会と出逢ったのは、1961年、母の鈴木光枝主演の「荷車の歌」の全国巡演に参加した時でした。

その時はまだ日本中が今よりもっ

ともつと貧しく、客席はほとんどが男性：「結婚した女性が芝居を観続けられるような時代が早く来るといわねえ：」と言っていた方の言葉が今も私の心に残ります。

人は何時でも自分の人生の主人公です。「三多摩演劇をみる会」で沢山の優れた演劇と出逢い、お友達をつくり、貴方の人生をもつともつと豊かで力強いものになさって下さい。

会員の皆様のあの輝くような笑顔に、お逢いしたくて、私たち俳優は精一杯の舞台をお届けするので

加藤剛（劇団俳優座）

芝居を初めて観た日の事は忘れられません。夜の街路を口もきかず、立ち止まらず、バスにも乗らず、電

車にも乗らず、いつのまにか幾駅も歩きました。

歩き続けて気がつくとも40年も経っていました。私は舞台に立つ人間になつていました。歩き始めた上はもう歩くのを止めないでしょう。

舞台袖から舞台へと一步を踏み出すとき、私はいつも、歩き出したあの日のことを思い出します。

「初めて芝居を観ましたー」そう言つて差し伸ばされる手を、私はあの日の自分へのあいさつのように握りかえます。

未知の友人を初めて客席に迎える喜びのために、私たちの人生はあ

るのです。「三多摩演劇をみる会」の健やかな御発展を祈りつ。



発行にあたって

コロナウィルスのまん延で、全国の鑑賞団体が会員を減らしています。かつてない組織の危機です。

みる会も大変です。この危機をどう受け止めて、どう乗り越えたいのか悩みます。

そこで会員のみなさんから「三多摩演劇をみる会と私」について原稿を募集したところ、多様な声が寄せられました。ありがとうございます。

どの文面からもコロナに負けないでみる会の存続を願う気持ちがいかりと伝わってきます。

みる会がんばれ、という応援の文集をお届けします。

2021年9月24日発行

三多摩演劇をみる会プロジェクト
チーム・役員会

<https://santamaen.jindofree.com/>